攻撃性の情動的側面・認知的側面と怒りに対するコーピングが全般的健康に及ぼす影響

山内　剛

〈目的〉

攻撃性は，冠状動脈心疾患をはじめとした身体疾患との関連が注目されている個人特性であるが，特定の身体疾患を持たない集団（たとえば大学生）においても，攻撃性が主観的健康感に悪影響を与えることが指摘されている．しかしながら，攻撃性の情動的側面（短気），認知的側面（敵意）のいずれが健康に影響を及ぼしているのか明確ではない．また，攻撃性が健康に影響を与える際にどのような変数が介在しているかが明かでなく，どのようなメカニズムで影響をあたえているかに関する示唆や，介入に関する示唆が乏しい．さらには，縦断的研究が行われておらず，攻撃性が健康の問題を予測する要因であるかが明らかでない．そこで本研究では大学生を対象に，攻撃性が全般的健康に与える影響と，怒りに対するコーピングの仲介効果を検討した．また，縦断的研究を行い，攻撃性が健康の問題を予測しうるかを検討した．

〈各研究の概要〉

1）日本語版Behavioral Anger Response Questionnaire (BARQ) の作成　まず，わが国において用いられている，怒りに対するコーピングに関する既存のモデルは，妥当性が疑問視されているため，Linden et al. (2003)の6因子モデルがわが国において妥当であるかを検討し，それを測定する尺度として日本語版BARQを開発した．その結果，6因子モデルはわが国においても妥当であることが示された．また，日本語版BARQは一部の下位尺度に修正の余地があるものの，十分な信頼性・妥当性を有した尺度であることが示された．

2）攻撃性が大学生の全般的健康に及ぼす影響と，怒りに対するコーピングの仲介効果　敵意と短気が全般的健康に及ぼす影響を検討したところ，健康のいずれの側面に関しても，悪影響を及ぼしているのは敵意のみであることが示唆された（β =.24 ～ .54）．次に，対人ストレス仲介効果を検討したところ，敵意から身体的症状への影響において，対人ストレスが介在していた．また不安と不眠への敵意の影響においても，対人ストレスの介在が認められたが，敵意の直接の影響がより強く見られた．その他の側面への敵意の影響においては，対人ストレスは介在していなかった．これらの点から，身体的症状以外の側面においては，敵意の直接の影響が強いか，今回検討していない他の変数が介在している可能性が示された．次に，怒りに対するコーピングの仲介効果を検討したところ，敵意の直接の影響がもっとも強く，また社会的活動障害以外の側面に対する敵意の影響において，影響力は決して強いものとはいえないものの，反すうが介在していた．この点から，敵意的な者の健康の問題への介入には，敵意の軽減が重要であることが示された．また，影響は強くないものの，コーピングは個人特性である敵意よりも変容が比較的容易であると考えられることから，介入を考える上では反すうも考慮することが有用であることが示唆された．

3）大学生の全般的健康の問題の予測における攻撃性の有用性　全般的健康状態の変化に対する攻撃性の影響を検討した結果，健康のいずれの側面の変化に対しても，短気，敵意ともに影響を与えていなかった．このことから，攻撃性は全般的健康の問題の予測という点では有用ではないことが示唆された．

〈主な文献〉

Linden, W., Hogan, B. E., Rutledge, T., Chawla, A., Lenz, J. W., & Leung, D (2003). There is more to anger coping than “in” or “out”. Emotion, 3, 12-29.